

GUNSLINGER STRA
TOS 極歌〜Requiem〜

ユニ@カスリンガー

西暦2315年、日本と言う国は戦争も無く平和だった。表向きにはね。

5年前、長年続く大幅な技術革命と次々と発展する医術により、日本は世界トップの権威を手に入れた。だが、それと同時に数多の派閥による。政権争いが勃発した。軍を民を金を使った醜く醜惡な争いは3年ほど続いた。

2年前そこに終止符が打たれた。誰もが元の日本に戻ると思った。しかし、現実とは違った。他の派閥の者の扱いは奴隷に近く、ろくな人生を歩めはしない。

また、上位の者も、退屈な人生を一生過ごさなければ成らない。そう思ってたんだ。でも、事件は突然に起きたんだ。

王の蜜行はこれだけではなかった。

目次

001	「僕は適性者」
002	「僕の友達・・」
003	「報酬は箱」
004	「ボス」

001 「僕は適性者」

「ふふふ、これは面白い事になりそうだ」

勝利!!

放送『昇格おめでとうございます!』

LEGEND・・・GOD

大和「・・・ニッ」

周り「「おおおお !!」」

大和「苦勞する事、はや1年。まさかガンストでGODの座に着けるとは!」

凜「やったね!」

大和「うん!」

僕は仙石大和（センゴクヤマト）ちなみに高校2年生。ガンストを始めてもう1年を超えたあたり。僕はこのゲームの最高ランク「GOD」になった。

このゲームは銃で敵を撃つゲームっと軽く説明したが、そんな簡単なゲームじゃないんだ。まあ説明は省くよ。長くなるし

凜「私が教えたのに、全く追いつけないね」

この子は真田 凜（サナダリン）、同じクラスの女子だ。僕はこの子からガンストを教えてもらってやり始めたんだ。なんでも一緒にやる人がいないらしく、たまたまゲームセンターに居た僕と友達に話しかけて来て、かと思えば急にガンストをやらせてきた。まあ根はかなり良い人なんだけどね。

恵梨「もう、ヤー君強すぎだよお」

大和「まあバーストの恩恵だよ」

そして、こっちの女の子が十恵梨（トウエリ）、僕とほぼ同じ理由でガンストやってる。僕とは幼馴染なんだ。

恵梨「これで目指すは全国1位だね」

大和「でも、そろそろ帰ろうか、明日も学校だし」

恵梨「そうだね、帰ろう」

凜「へっ!?! いや、私はまだ……」

大和・恵梨「帰ろう！」

凜「はい・・・」

~~~~~

スタスタ

大和「ふうあ~~~~ 眠い、もっと早く寝ないとな、寝不足だ」

恵梨「それはヤー君が早く寝ないからだよ」

大和「・・・いつから隣に居たの?・・・」

恵梨「ふふーん、実は結構前から」

大和「どの辺?」

恵梨「ヤー君の家くらいからかな?」

大和「・・・」

朝から元気だな恵梨は、「僕に元気を分けてくれー」って感じた。どうもアサは苦手なんだよね。

まあ、なんだかんで学校に到着、授業は相変わらず楽し、先生は相変わらずうるさいし、友達とは相変わらずテンション高いし、……

大和「ZZZZ」

ピリピリピリ

大和「ん？ 凜だ。どうしたんだろ？ 『ガンスト行こうよ』かな？」

パカッ ピッ！

凜『ねえねえ！ たいへん！ とりあえず、恵梨と一緒に裏庭来て！』

大和「裏庭かあゝ、遠いなあゝ おゝい恵梨いゝ」

恵梨「ん？ えっ！ 何何何何!？」

大和「・・・テンション高いね」

恵梨「いやあゝ 学校でヤー君が話しかけてくるなんて、嬉しくて」

ゴゴゴゴゴゴ!! ↑周りの男子の攻撃的視線

大和「いやっ！ あれだよ！ 凜から連絡が・・・」

恵梨「なゝんだ、そうなんだ」

ふっ、一安心だ、恵梨は男子からの人気が高い。見た目も可愛いしスタイルもい



い、何より別け隔てなく誰にでも接せれる性格が好感が持てる。

ガシッ　グイ！

恵梨「ほら、早く行こう！　凜が待ってるし」

大和「あっ　引っ張らなくても行くから！」

恵梨「んじゃ、早く行こう」

大和「はいはい、分かったよ・・・」

仕方なく付いていく事にした。

~~~~~

大和「んで、何だ？」

凜「うふふ、なんだと思う？」

大和「早くと説明してくれないかな？　授業始まるよ？」

寝不足でさらに暇な時間を過ごしたので眠気はMAXなんだ。

凜「じゃーん、これみて」

凜が僕達に見せてきたのは黒いスーツケースのような箱だった。

恵梨「なに？これに1億円でも入ってるの？」

凜「違う！」

大和「じゃあ、着替え？」

凜「違うの、これみて！」

ガチャッ！

大和・恵梨「えっ!？」

凜「落し物じゃありませんね？」

中に入っていたのは絶対にここには無いはずの物だった。でも、ある。

大和「これってガンストのハンドガン？」

002「僕の友達・・・」

恵梨「このハンドガンって、風澄君が持つてると色違いみたいな、」

大和「いやいやいやいや、これすごいね、良く出来てる。精密に作られてるなあ

」

恵梨「しかも、2つも入ってる、ガンケース付きでね。」

バックの中には厳重に保管されたハンドガンとケースが入っていた

凛「よし、ちょっと大和これ付けてみてよ！」

恵梨「えっ！ダメでしょ？」

凛「まあまあ付けてるだけだし」

恵梨「でもおお・・・」

大和「付けるだけ良いんじゃないかな？、それに、どうせ作り物だろうし」

そう言って大和はハンドガンを手に取ると風澄のようなポーズを取った。

大和「どうかな？」

凛「おお！なんか様になってるね」

あまりにリアルでカッコ良かったので少しテンションが上がってしまった。

大和「よし、じゃあ、試しに引き金を壁に向かって引いてみたら……」

パーンッ！

大和・恵梨・凜「……！」

反動が少なく造られてるのか、大和の腕はあまり動かず、だが、打ち込んだ壁がへこんだ。

大和「えっ！今、弾……出た　？」

恵梨「それ、もしかして、まずいんじゃない？」

凜「無い無い！、そんなもの置いてないって」

プープープープー！

大和「なんだ……！」

凜「グラウンドの方から聞こえたよ？」

恵梨「今のって王族の放送音だよね？」

大和「なんなんだよ！」

タッタッタッタッ

しばらく走ると学校の上空に巨大モニター付きの飛行艇が飛んでいた。

大和「いったい何が・・・!?」

ピー ガガガッ

相変わらずの電波の悪さだ。王族は普段は嚴重な城の中にいるので飛んでいる電波もさほど良くは無い。

王様『いやぁー おはよう諸君！、本日も良い天気だねえ』

凜「あいかわらず、いけ好かないしゃべり方ね」

王様『今日は諸君らに楽しいゲームを用意した。』

大和「ゲーム？」

王様『ふっふっふ、先日、我が国の技術部が開発した、生物兵器と軍事兵器これを使う』

大和「生物兵器だと？」

王様『これをご覧あれ』

学生1「うわぁぁ何だよあれ!？」

学生2「気持ち悪い・・・」

王様『今にも飛び掛り噛殺そうとする眼、鋭い牙と爪を持ち、車をも持ち上げる。さらに・・・』

ドカンッ！

王様『大砲をもろともしない！ 諸君らにはこいつ達と戦ってもらおう』
目の前に映し出される光景に学生のはほとんどが驚愕としていた。この王は狂っている。全国放送で公開処刑をしたり等もあった。だから大砲が本物であることも、その威力も知っていた。だが、その生物は煙を上げるだけで無傷なのだ。

王様『ふっふっふ、しかし、諸君 これを見たまえ！ これは「空間分子結合」という特殊な方式を使い、自動で弾を無限に供給し続ける銃だ。』

時間で自動でリロードされる銃、確かにすごいが、似た様な物が他にもあった。それほどの驚きは無かった。が、しかし

王様『更に、この方法で作られた武装のみ、』

バーンッ

化け物「ギョオオオオ・・・」

王様『この生物兵器を倒せるのだ。』

大和「……」

王様『さあ、ゲームを始める。武装はいたる所に黒いボックスの中に入っている。

見つけて自由に使いたまえ。』

凜「これもそうだったのかも」

恵梨「そうだね……」

王様『生物兵器は3時間毎に送る。それでは、』

モニターが数字の画面へと切り替わり、各地で轟音が上がる。

『3』

『2』

『1』

王様『作戦開始！！！』

（~~~~~）

恵梨「うそ！　こんなの嘘！」

凜「こんな事ってありえるの……」

大和「本当にこんな事が……」

学校の前には大量の化け物が居た。グラウンドにも結構な数がある。人間のよ
うに二足歩行をしているが両手は刃物のようなデカイ爪、肥大化したようなデカイ
顔、まさしく化け物だ。

ドカーアーン

凜・恵梨・大和「！」

恵梨「グラウンドの方から聞こえたよね？」

大和「行ってみよう！」

思わず走り出してしまった。混乱してるせいでもあるが、何か体が軽い、何故だ
ろう……

女子A「きゃああ!!」

悲鳴が聞こえて我に戻る。よく見ると1人の女子がヤクシャ達に囲まれている。
同じクラスで髪が長く眼鏡が特徴的な女の子だ。その他にも、あちこちで色んな人
達がヤクシャ達に包围されていた。

そして次の瞬間、

化け物「ウオオオオオオ！」

化け物の両手が光り始めた。そしてバチバチと音をたて始める。

ヒュウウウウウン……………

女子A「やめて…、助けて……………」

化け物「ウオオ」

しかし、救いの声は誰にも届かなかった。

ドガン ドガン

強烈な爆発音が鳴り響いた。ヤクシャの手から放たれた弾が躊躇無くその女子を次々と当てていく。

ヤクシャ「ウオオオオオオオ！」

そして先ほどと同じように唸り声を上げるヤクシャ、その中心には巻き上がった砂埃が舞っている。

恵梨「……………」

恵梨は言葉にならない声で鳴いていた。そういえば良く喋っていた。

大和「ん？、なんだこれ？」

急に顔に付いた物を手にとってみると、そこには焦げた髪の毛だ、それは長く、その髪の毛は……

大和「これは、あの子の……」

そして砂埃が次第に薄くなり、中の様子が伺える様になってきた。そして、そこにあったのは想像絶する者、否、物だった。

大和「2人とも、見るな！」

凜「…… !!」

恵梨「どうしたの？」

2人の体を引っ張り、砂埃の中の様子を見れないようにする。

大和「……」

大和（死んでる。しかも、普通じゃない、体が木っ端微塵だった。体の中身が……）

考えただけで吐き気が湧き出るほどの物だった。皮膚は焼ききれそのまま中身へ貫通、その後爆発。それが多方向から同時に行なわれたのだ。

大和「……………」

2人は隠れて、

凛「え…… うん……」

大和「ありがとう、」

恵梨「……ヤー君は ？」

大和「行ってくるよ」

恵梨「行っちゃダメ!!」

そう言って、恵梨が大和の腕を掴む。初めて聞くほどの恵梨の音量に思わず振り返る。

恵梨「やだあ、ヤー君と離れたくないよお」

大和「……大丈夫だから」

そう言いつつも恵梨の眼から尋常じゃないほどの何かを感じて大和は言えなかった。

大和「ごめん……でも、行かなきゃ」

そう言って、腕を振りほどいた。

恵梨「あっ……」

ダダダダダダダダダッ！

右・左・右・左と交互に引き金を引く、弾はyaksha達の体や頭を貫く、カチッ！

大和「弾が出ない！、」

yaksha「ウウウウ」

だが、まだ1匹残っている。そして大和に向かって両手を構えた。

大和「死にたくない、まだ死ねない!!、待ってる人があるんだから!!」

とっさに体を動かす、相手の懷に潜り込んだかと思えば、持っていたハンドガンで思い切り殴りつけた。

ボフウッ

yaksha「ヲオオオオオ・・・」

そのままyakshaは地面に倒れ声を発さなくなり、震えも止まった。その時、放送『こちら辺一帯の殲滅を確認しました。』

yaksha達の死体、人間の死体、それらがまるで風に乗ったかのように消えた。だが、まだ始まったばかりだ。

003 「報酬は箱」

ウオオオオオオオオオン！

学校中に響き渡ったのは、まるで甲子園で試合開始時に流れるサイレンの様な音だった。

放送『今回の戦死者14名。残り生徒数562名。今回のミッションは4時間後、それでは……』

大和「何なんだよこれ!?、人が死んでんだぞ!、しかもまだやるのかよ!ふざけんな!」

pi pi pi pi pi pi

大和「誰だ?」

?『こちらGSバーチャライズセンターです。あなたは今回Aランク以上の成績を収めた為、報酬を与えたいと思います。後方をご覧ください。』

そういわれて後ろを振り返ると、黒服の男が3人立っており、1人1つ黒い箱を持っていた。

大和「お前ら何者なんだよ!？」

黒服「二………二」

大和「だんまり!?、ふざけるなあ!!」

？『黒服から箱をお受け取りください、ただしお受け取り出来るのは1つだけ、中はもちろん武器が入っております。』

大和「これを中止しろ！」

？『武器をお受け取りください。それでは……』

プツッ

プー プー プー

大和「くそっ！なんで通話終わった瞬間に圏外になんだよ!!」

黒服A「仙石様、こちらの中から1つお選びください。D、S、Tといずれのアルファベットの箱に別々の種類の武装があります。」

大和「……わかった、選べばいいんだろ、選べば」

黒服B「それと先に言わせてもらうが、この中の武器を入手後、そのハンドガンは貴様は使えなくなる。その事も考えて選ぶんだな」

ここは、大事だ。無難に考えるならダブルスタイルだろう、必ず攻撃、妨害の武器が来る。それにサイドスタイルとタンデムスタイルは博打だ、グラビティガンとかが来た場合どうしようもない。

このゲームがガンストを元にしてるのは違う、武器もおそらくWPの中にあるものを適当に抜いている可能性が高い。

大和「……決めた、」

黒服A「それでは選んでください。どの箱ですか？」

大和「S、サイドスタイルの箱をくれ」

黒服A「かしこまりました。おい置け！」

ガタンッ！

黒服A「それでは失礼します。」

そういつて黒服の男達は歩いていった。正直どこに歩いて行ったかはわからない。

大和「さてと、開けるか」

凛と恵梨を守るような武器よ来い！

大和「これは……！」

試しに持ってみる、結構な重みだ。これが武器！

大和「いい武器だ。これなら、行ける。守ってみせる!!」

その両手に掲げられた武器は特殊な装置で光粒子を高速で押し出すことにより完成した。

大和「ありがとう、ビームマシンガンを貸してくれて、アールン、」

004「ボス」

大和「……俺が 2人を守る」

ウウウウウウウウ！

戦闘開始のサイレンが鳴り響く中、武器を構えた大和がそこに居た。

大和「2人は校内に居てくれ、俺が外で奴らを倒す」

あれから色々探索して武器を見つけた。意外とあるものだった。ざっと4個ほど手に入れた。中にあった武器は、スタンガン1丁、マグナム2丁、プラズマガン1丁、エリアシールドがあった。重く扱いにくいプラズマガンは俺が持ち、2丁マグナムとスタンガン&エリアシールドは唯と恵梨に持たせた。

大和「来るなら来い！化け物め、誰も殺させやしない」

前回わかった事はを整理しよう。こいつらの攻撃が受ければ必ず死ぬという事、そしてAIM（弾丸の命中率）はさほど高くないという事、最後にこちらの格闘は

少ししかダメージが入らないということ、これだけだ。

大和「大丈夫、俺はGODだ。ミッション戦なんて当の昔に全クリした。」

シュン シュン シュン シュン

ヤクシャ達が現れて来る。その時だった。

大和「えっ！」

ヤクシャ達の真ん中に一回り大きな化け物ラクシャーサが現れた。

大和「馬鹿な、2m半はあるぞ、ゲームと現実でこんなに威圧が違うのか」

ヤクシャよりも大きく体はグロテスクに装飾され、尖った口と更に鋭い牙、そして両手に備えられている巨大な発射口、ゲーム内ではヤクシャ達よりも精度、威力、速度と如何なる点においてもラクシャーサの方が高い。

大和「ラクシャーサかよ、しかもヤクシャが……」

言葉を失うのも当然だ。ざっと50体近くいる。前回大和がやっとの思いで倒したのが6体である。

大和「狙撃武器が無い以上、俺は近づくしかない、ビームマシンガンのギリギリの射程で立ち回りたいが、生憎ロック機能なんかないし、」

ちゅちゅちゅちゅちゅ

!!

サイレンが鳴り始めた。その瞬間、ピタリとも動かなかったヤクシャ達が動き始めた。知識があるのだろうか、必ず数匹の集団で成るべく人数が少ない人数の所に向かって行った。もちろんそれは大和も例外ではない。

グルルルルルウウ……

大和の所には3匹のヤクシャが集まった。

大和「おいおい、俺はハンドガンだけでお前らの2倍の数を殺したんだぜ……」
どんどんヤクシャが大和に近づいていく。

（この距離なら）

ビュンッ ドン！

一瞬の轟音と共に一瞬の爆発音が鳴り響いた。そして1匹のヤクシャが体を粉砕されながら吹き飛んだ。

大和「我ながらナイスAIMだ。後2匹」

大和は武器をプラズマガンからビームマシンガンに変え、そのまま激射、

グオオオオオオオオ!!

大和「クイックドロ―&ヘッドショット、終わりだ」

蜂の巣となり頭の形状が無くなったヤクシャはピクリとも動かずそのまま倒れる。

ヤクシャの残り1匹が空高く逃げる。ビームマシンガンは弾切れ、テンションが上がりすぎた大和は弾数管理を忘れていた。

大和「ヤバイ、プラズマガンじゃ届かないか？　クソッこのままじゃ逃げられる」

バジッ

ヴオオオオオオオ

『逃げられる』そう思った瞬間、ヤクシャの体は宙に浮いたまま止まる。そしてダンッ

ヤクシャの体に2つの風穴が開きそのまま落ちてきた。

大和「ラッキー、これで!!」

そのままプラズマガンで追撃、ヤクシャはそのまま地面に叩き落された。

大和「ふうふうよかった」

凜「全く、大和は私たちが居ないとダメね」

恵梨「もっと頼ってくれていいんだよ？」

そこに現れたのは凜と恵梨だった。

大和「……」

恵梨「ねっ？」

大和「あぁー」 分かった分かった。ありがとう」

凜・恵梨「クスクス」

大和「なんだよ!!」

こうして何とか切り抜けた。だが、まだ……

グルルルルウウウ

大物は残っている。

GUNSLINGER STRATO

S 極歌～Requiem～

著者 ユニ@カスリンガー

発行日 2022 年 3 月 31 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/14547/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。